

春になる前夜

小川未明

青空文庫

すずめは、もう長い間、この花の国にすんでいましたけれど、
 かつて、こんなに寒い冬の晩に出あつたことがありませんでした。
 日が西に沈む時分は、赤く空が燃えるようにみえましたが、日
 がまったく暮れてしまうと、空の色は、青黒くさえて、寒さで
 音をたてて凍て破れるかと思われるほどでありました。どの木の
 こずえも白く霜で光っています。ものすごい月の光が一面に、黙
 った、広い野原を照らしていたのでありました。
 すずめは、一本の枝に止まって、この気味悪い寒い夜を過ごそ
 うとしていたのです。そのとき、ちようど下の枯れた草原を、
 おおかみが鼻を鳴らしながら通つてゆきました。

山にも、沢にも、もはや食べるものがなかつたので、おおかみはこうして飢しい腹をして、あたりをあてなくうろついているのです。すずめはそれを毎夜のように見るのでした。おおかみも今夜は寒いとみえて、ふつ、ふつと白い息を吐いていました。そして、氷の張った水盤のような月に向かつて、訴えるようにほえるのでありました。

すずめは、さすがのおおかみもやはり、今夜はたまらないのだと思つて、黙つて下を見ていますと、おおかみは、急に腹だたしように、もう一度高い声で叫びをあげると、荒野を一目散に、あちらへと駆けていってしまったのです。すずめはしばらく、その後ろ姿を見送っていました。いつかその姿は、白いもやの中

に消えて見えなくなりました。

すずめは、もうこれから、長い夜をなんの影も、また声も聞
 ことがないと思ひました。どうか、今夜を無事に過ぎたいもの
 だと思つて、じつとして目を閉じて眠る用意をしたのです。しか
 し、寒くて、いつものように、どうしてもすぐには眠つくことが
 できませんでした。

そのうち、急にあたりがざわざわとしてきました。驚いて目を
 開けて見まわしますと、いままで、さえていた月の面には、雲が
 かかつて北西の方から、寒い風が吹いてくるのでした。すずめ
 は、いよいよ天気が変わると思ひました。

北国には、こうして、掌の裏を返さないうちに、天気の変

ることがあります。

このとき、ここに哀あわれな旅たび楽がくし師の群むれがありました。それは
としよおとこ年寄りの男と、若わかい二ふたり人の男と、一ひとり人の若わかい女おんならでありました。

この人々ひとびとは、旅たびから、旅たびへ渡わたつて歩あるいでいるのです。そして、
この荒野あれのを越こして山やまをあちらにまわれれば、隣となりの国くにへ出でる近ちか道みちが
あつたのです。もうこちらの国くにも思おもわしくないとみえて、その人ひと
たちは、隣となりの国くにへゆこうとしたのでしよう。そして、道みちを迷まよつて、
こんな時じぶん分に、ようやくここを通とおるのであります。

みんなは、うすい着物きものしかきていません。また、それほどいろ
いろのものを持つてもいる道理どうりとてありません。まったく、貧まずしい
人ひとたちでありました。

みんなはたがいに慰わり合いながら、月の光を頼りに歩いてきました。このとき、ちら、ちら、と雪が降つてくると、もはや、一歩も前へは進めなかつたのです。

「ああ、とうとう雪になつてしまつた。」と、一人の男が、ため息をもらしていいました。

「私たちは、今夜は、野宿をしなければならぬでしょうね。」と、若い女が、頼りなさそうにいいました。

「野宿をするにしても、この雪ではねるところもないだろう。」と、ほかの男がいいました。

四人のものは、転げるばかりに、疲れと、不安とで、もはや前へ踏み出す勇氣もくじけていたのです。

雪は、ますます降つてきました。そして、たちまちのうちに、木を、丘を、林を、野原一面を、真つ白にしてしまいました。月の光は、おりおり雲間から顔を出して、下の世界を照らしましたけれど、その光を頼りに歩いてゆくには、あたりが真つ白で、方角すらわからなかつたのであります。

「おじいさんは、あんなに疲れていなさる。」と、先になつていた一人がいつて、振り向いて立ち止まりました。すると、ほかのものも等しく立ち止まつて、みんなから遅れがちになつて、とぼとぼと歩いていた年寄りを待つのであります。

「ああ、みんなのもの、もう急いだつてしかたがない。何事も運命だ。私たちが道を迷つたのも、またこうして雪が降つてき

たのも、みんな運命だとあきらめなければならぬ。この雪では、夜道もできないだろう。そして、いつもおおかみや、くまに出あわないうもかぎらない。せめて、ここにある酒でもみんなして飲んで、唄い明かそうじやないか。」と、おじいさんはいいました。

「ほんとうにおじいさんのいいなさるとおりだ。私たちは、長い間、仲よくして、諸国を歩きまわってきたのだ。最後まで、おもしろく、いっしょに死のうじやないか。」と、若い男の一人がいいました。

「わたしは、悲しい。しかし、いまはどうすることもできません。すべての希望を捨ててしまいます。」と、女は涙ながらにいいま

した。

「ああ、泣くでない。若い女や、若い男が、このまま死んでどうするものか、きつとすぐに生まれ変わってくる。私のいうことを疑うじゃない！」と、おじいさんはいいました。

みんなは、背中に負っている荷物を下ろしました。そして、雪の上に拡げて、徳利に入れて下げてきた酒をついで、めいめいが飲みはじめました。みんなは、いくら寒くても、酒の力で体があたたまりました。すると、おじいさんは、

「さあ、みんなで歌うだ！ 弾くだ！ この世でのしおさめに、力のかぎり出してやるのだ。そして、くまも、おおかみも、山も、谷も、野原も、心あるものを、みんなびつくりさしてやれ！」と、

みんなを励はげましていいました。

やがて、ときならぬいい音色ねいろが、山奥やまおくのしかもさびしい野原のほら

の上うえで起おこりました。笛ふえの音ね、胡弓こきゆうの音おと、それに混まじつて悲かなし

い歌うたの節ふしは、ひっそりとした天地てんちを驚おどろかせました。おじいさんは

雪ゆきの上うえにすわつて音頭おんどをとりました。若い女わかおんなと、若い一人わかひとりの男おとこ

立たつて踊おどりました。一人ひとりの男おとこは、やはり、雪ゆきの上うえにすわつて胡こきゆう

弓うを弾ひいていました。女おんなはいい声こえで歌うたい、立たつて踊おどっている男おとこ

は、片脚かたあしを上げあげて、唇くちびるに笛ふえを当あてて吹ふいていました。

雪ゆきは、いつしかやんで、月つきの光ひかりが、この下したのときならぬ舞踏ぶとうか

会いをたまげた顔かおをしてながめていますと、いままで隠かくれていた

星ほしまでが、三つ、四つ、しだいにたくさん顔かおを出だして、空そらの遠えんぼ

方うからこの有あり様さまをのぞいていたのです。

木きの枝えだに止とまつて、すべてのことを知しりつくしていたすずめは、

悲かなしくて悲かなしくて、たまらなくなつて、熱あつい涙なみだが目めからあふれて

出でました。しかし、そのときの寒さむさというものは一ひとつ通りでなく

て、目めから出でた涙なみだは、すぐこに凍こつて両りようほう方の目めはふさがつてし

まいました。すずめは足あしをあげて目めをぬぐおうとしましたが、こ

のときは、はや両りようほう方の足あしが枝えだの上うえに縛しばりつけられたように、

凍こりついて離はなれませんでした。

すずめは、つくづく寒かんき気きというものを情なさけなしな、冷れい酷こくなも

のだと思おもいました。月つきも、星ほしも、また雪ゆきまでも、ああして感かん心しん

して哀あわれな歌うたをきき、音おん楽がくに耳みみを澄すましているのに、寒かん気きだけ

が用捨なく募ることを、すずめは腹だたしくも、またかぎりな
 いうらめしいことにも思つたのです。

そのうちに、どうしたことか、歌の声も、音楽のしらべも、
 だんだん小さく、低く、遠のいてゆくのを感しました。けれど、
 すずめは、ついに明くる日の朝まで身動きもできず、目を開ける
 こともかなわず、鑄物のように木の枝に止まっていました。

太陽が照らしたときに、すずめは、はじめてあたりのようす
 を知ることができたのです。

「昨夜のことは、みんな夢ではなかつたか、あの人たちは、どう
 なつたのだろう？」と、すずめは、小さな頭を傾けて思いました。
 なぜなら、あたりは、雪が二尺も、三尺も積もつていて、そのほ

かには、なにも目めの中なかに入はいらなかつたからです。

それから、長ながい間あいだ、すずめは、このことが不思議ふしぎでならなかつたのです。すずめは毎日まいにち、雪ゆきの中なかを山やまのあちらへ、また、林はやしのこちらへと飛とびまわつて、だれも通とおらない、さびしい雪ゆきの広野ひろのを見渡みわたして鳴ないていました。

そのうちに冬ふゆも老たけて、だんだん春はるに近ちかづいてまいりました。

ある日ひのこと、西にし南みなみの空そらのすそが、雲くも切れがして、そこから、

なつかしいだいたい色いろの空そらが、顔かおを出だしていました。すずめは、

木きの枝えだに止とまつて、じつとその方ほうを見みてぼんやりとしていました。

暖あたたかな南みなみの風かぜが吹ふいてきました。それからというもの、毎日まいにち

のように、南みなみの風かぜが吹ふき募つつて、雪ゆきはぐんぐんと消きえていきまし

た。すずめは、もう冬も逝ふゆつてしまふのだと、体からだを円まるくして、心地こちいい、暖あたたかな風かぜに羽はねを吹ふかれながら、いままで埋うもれていた山やまの林はやしや、また野原のほらの木立こたちが、だんだんと雪ゆきのなかに姿すがたを現あらわしてくるのを楽たのしみにしていたのです。

「ああ、じきに花はなが咲さくころともなるだろう。そうすると、他国たこくの方ほうから、名なの知しらないような美うつくしい鳥とりが飛とんできて、林はやしや森もりの中なかで唄うたをうたうであろう。それを聞きくのがたのしいことだ。」と、この山やまのふもとに生うまれて、この野原のほらと、林はやしとしかほかのところは知しらないすずめは、せめて他国たこくの鳥とりの唄うたを聞きくことを幸こう福ふくに思おもっていたのです。

すると、ある暖あたたかな晩ばんに、すずめは野原のほらの中なかから、笛ふえの音ねと、

胡弓こきゆうの音おとと、悲かなしい唄うたの声こえを聞ききました。すずめは、それを聞きくとびつくりしました。いつかの哀あわれな旅たび楽がく師しを思おもい出だしたか
らです。

いままで、その野原のほらの中なかに凍こおっていた、それらの音色ねいろが、南みなみの風かぜに解とけて、流ながれ出だした物ものと思おもわれます。しかし、その人ひとたちの死しがい骸がいは、飢うえたおおかみやくまに食たべられたか、見みつかりませ
んでした。ただ、この物もの悲かなしい音色ねいろは、風かぜに送おくられて、その後のち、
幾いくよ夜よも、この広野ひろのの空そらを漂ただよっていたのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1977（昭和52）年C第2刷

初出：「東京日日新聞」

1922（大正11）年1月7日～10日

※表題は底本では、「春《はる》になる前夜《ぜんや》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年12月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春になる前夜

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>